

2018-5-1  
No.1021 250円

# 思想運動

活動家集団 思想運動

発行・小川町企画 〒113-0033 東京都文京区本郷3の29の10 飯島ビル1階 ☎03-3818-6671 FAX03-3818-3199 (郵便振替)00190-0-758235  
小川町企画・関西連絡先 ☎080-4700-6461  
HP <http://www.shiso-undo.jp/>  
購読料:年間6,000円 半年3,000円(送料共)

## 南北首脳会談・板門店宣言を支持・歓迎する



「わが民族同士」ののぼりを掲げて行進する6・15学生青年協議会の若者たち  
南北首脳会談が開催された四月二十七日夕刻、新宿駅周辺で「南北首脳会談を熱烈に支持する在日コリアン青年学生パレード」が行われた。  
撮影：編集部

## 国際メーデー一三三二周年にあたって

「森友・加計」事件をはじめとした数々の不正・犯罪行為がいかに明るみに出されようとも権力の座に居座りつづける安倍独裁政権。その反動政策があらゆる分野で展開されるなか、労働者のいつその労働強化・搾取強化のための法制度改悪が「働き方改革」なる欺瞞的呼称の下に押しすすめられようとしている。「労働時間の絶対的制限規制」と称して、過労死ラインの二〇〇時間残業が法的に認可されようとしている。一日八時間労働であれば、月間二労働日として月一六八時間。一〇〇時間残業を加えれば月二六八時間、一日にして二・七時間労働。一九世紀後半の労働状態に逆戻りだ。あわせて裁量労働制拡大や高度プロフェッショナル制など、労働への時間の縛りを取り払うことが狙われている。労働力を時間で量って売るという概念こそは、老若男女さまざまな条件・能力をもちあわせた労働者が、労働をつづけて資本に殺されないために闘い続けてきた歴史的成果にほかならない。それすら根こそぎにしようとする資本の暴力は、出口のない資本主義の危機の裏返しなのだ。

## 労働者の闘いの歴史的成果を破壊する「働き方改革」 資本の暴力に労働者の階級的闘いで対抗しよう

「メーデーは労働者の闘いの結集の場」  
ストライキ。今一八春闘を顧みればこの言葉がいかに「非現実」と響く。一九世紀八時間労働制を勝ちとるために先達たちはどう闘ったか？  
二時間〜四時間という過酷な長時間労働が当たり前の

つた一九世紀後半、八時間労働を求める各国の闘いは高揚し、なかでも米国内各地で「八時間労働制が敷かれるまでは仕事道具を手にとらな」と、五〇万人がゼネストやデモに立ち上がった。

この日、一八八六年五月一日のメーデー集会が開催され、戦争遂行体制への移行のなか多くの弾圧を受けながらも三六年まで続けた。敗戦後は「働けるだけ働かせろ」をスローガンに四六年に再開された(食料メーデー)以降、政府・独占資本という階級敵を見据えた労働者階級の、文字通り闘いの結集の場となっていた。

今日の状況は一九世紀後半と変わらない  
現在、世界では約八〇の国々でメーデーを祝日としている。日本でも多くの組合が労働者の国際的祭典であるメーデーの休日化を要求して闘った。企業・職場単位では労働協約や就業規則による休日化の表現や、要求行動の積み重ねによって有給休暇が振替休暇によるメーデーへの参加を認めさせてきた。

しかし、こんにちの状況は一九世紀の一三三二年前と重なるにもかかわらず、ストライキなど権利獲得の現実的手段が「非現実」的とも見える。こ

の現状こそが問題なのだ。憲法に保障された労働三権、とりわけスト権の行使は労働者の要求実現のために不可欠だという事実を、わたしたちは何度でも想起しよう。職場・生産点での試行錯誤・討論を経た行動こそ、労働者の階級意識の再生の鍵がある。そうした実践の一つひとつが、ストを実行しうる態勢づくりに向けた一歩一歩なのだ。

労働運動の歴史的国際的流れに連なろう  
メーデーの日も働いている労働者が、雇用労働者五五〇〇万人余(うち非正規労働者が二〇六〇万人)のうちの大多数を占める現状がある。この呼びかけ(新聞)を手にとったみなさんは、仕事の休みをとってメーデーに参加されたらどうか？ 全国各地のメーデーを祝つ集いには、実際どれくらいの労働者が参加したのだろうか。もし「メーデーは会社休みですか？」「メーデーには有給休暇とれそうですか？」と若い人に問いかけたら、たぶん「なぜ休みなのか(平日なのに)」「なぜ休むの？」という答えが返ってくるだろう。そもそもメーデーに集う意味を知らない世代、メーデーに参加する意義を理解できない労働者が年々増えているなかで、メーデーの起源やその闘いの歴史を振り返り、その意義を再確認するこ

とがいまこそ必要だ。一九九七年以降、労働分配率は下降の一途、労働力の再生産も成り立たない労働者が二〇〇万人を突破してもなお増大しつづけている。製造業をはじめとして日本の生産力は著しく停滞(製造業は一九九五年から二〇〇年までOECD加盟国中一位、二〇一五年現在同一四位)、デフレからの出口は見えない。しかしこの惨憺たる現状こそが、資本主義の延命策として七〇年代後半以降遂行されてきた新自由主義政策によってつくられた現実なのだ。そして、資本とその政治的代弁者たちにとつての「解決」の私たちこそは、労働者からいっそう搾り取ることで決定的破綻を先送りしようとする「働き方改革」なのだ。一方では、資本にとつての最大の儲け策——戦争を招来する財界・軍産複合体が活発に蠢いている。状況はわたしたちに問うている。この政治・経済システムを根本から転換する闘いをすすめない限り、労働者の強権取体制と戦争遂行体制づくりは進行するだけではないのかと。

社会主義をめざす労働運動・大衆運動の歴史的・国際的な流れと、自分たちの闘いとを紐帯をいっそう強め、明日からの闘いの糧としよう。

国際メーデー一三三二周年方

歳！

田沼久男

政治	朝鮮半島情勢の急展開と日本人の課題(藤原晃)……………2面
沖繩	辺野古ゲート前五〇〇人集中行動(飯上みづ子/大館まゆみ) ……3面
労働	日本郵政、住居手当廃止の意味するもの(土田宏樹)……………5面
国際	戦争を厭わないシリア攻撃を糾弾する(三田博)……………6面
文化	追悼・新崎盛暲氏『天西巨人—革命と—』『モヤメル』を観て……………7面
文化	紙つぎで映画『タクシードライバー』(井野茂雄)……………8面